

## ヘーゲルの実体論を理解するために ——スピノザの実体論への批判から見えてくるもの——

中 畑 邦 夫

### 0 はじめに

ヘーゲルの『大論理学』「第一巻 客観的論理学 第二書 本質論」の「第三編 現実性 第一章 絶対者」は、解釈をするにあたっていささか困難な構成において書かれている。具体的には「A絶対者の開示 B絶対的屬性 C絶対者の様態」という本論に加えて「注解 スピノザの哲学とライプニッツの哲学」という構成で書かれている。この章の解釈の困難は、特に「B」「C」のタイトルからもわかるように、その名が表立って登場することはないものの、明らかにスピノザの実体論を下敷きとして展開されているにもかかわらず、肝心のスピノザの実体論については注解で後付け的に論じられているということ、また逆に、この注解（むしろ端的に、スピノザの実体論への批判と表現した方が適切である）を理解するためにはヘーゲル自身による絶対者の議論を十分に理解している必要がある、という点にある。つまり両者は互いに補完的な関係にあって第一章の全体が構成されているのであり、一方を十分に理解するためには他方を十分に理解することが必要である。そこで本稿では、「注解」の中でもヘーゲルによるスピノザ批判に注目し、立ち入って検討することにする<sup>1</sup>。

---

・ヘーゲルからの引用に際してはズールカンプ版第6巻の頁数を示した。また、スピノザ『エディカ』からの引用に際しては『世界の名著 30 スピノザ・ライプニツ

## 1 第一章への「注解」の意義

ヘーゲルによるスピノザ批判を詳細に検討するに先立ち、ここで第一章への「注解」の意義を確認しておく。ここでテーマとなっている、さらに言えば批判の対象とされているのはスピノザによる実体論とライプニッツによるモナド論である。ここで特にこの両者が取り上げられているのは、端的に言えば両者が「実体」としているもの（スピノザの場合には「実体」であり、ライプニッツの場合には「モナド中のモナド」あるいは「絶対的モナド」である）および「様態」あるいは「現実性」、つまり諸々の有限者とそれらが構成する世界そのものとのとらえ方に失敗しているからである。すなわち、スピノザの実体論においては実体と様態あるいは有限者とが互いに外的な関係においてとらえられるにとどまっておき、ライプニッツのモナド論においてもまた、有限者である諸々のモナド同士も、また諸々のモナドと最高の実体であるとされる「モナド中のモナド」あるいは「絶対的モナド」も互いに外的な関係においてとらえられているにすぎないのであると、端的に言えばヘーゲルはそのように解釈しているのである。このことはつまり、両者がともに実体における完全な自己関係をとらえることに失敗しているということなのであり、ヘーゲルはまさにこの点をみずからの絶対者論において克服したと自負しているわけである。自己関係を欠いた実体論として哲学史上典型的なのは、ヘーゲルがスピノザの実体論への批判の最後に論じている「流出説」である。順番は前後するが、ここでヘーゲルの流出説批判を簡単に見ておこう。すなわち、「流出という東方の観念において」、実体は「自己自身を照らす光」であるとされる<sup>2</sup>。しかしそれにとどまらず、この光は「流れ出しもす

---

ツ』（工藤喜作・斎藤博訳 1969年）の頁数を示した。

<sup>1</sup> つまり、ヘーゲルの絶対者について論じるためにはスピノザの実体論についても同時に論じなければならない。本稿は言わばスピノザ批判の側からヘーゲルの絶対者論を逆照射するものである。ヘーゲルの絶対者論の本論そのものを論じたものとしては拙論「スピノザ的実体概念の克服——『大論理学』における「絶対者」章の意義」（『ヘーゲル論理学研究』第6号 2000年12月 41～52頁）を参照されたい。

<sup>2</sup> 198 なお、本稿で私がヘーゲルのテキストを引用する際、主語を「実体」として論

る」<sup>3</sup>。実体そのものである「曇りなき光の明るさ」は、流れ出すことによって実体そのものから「遠ざかる」<sup>4</sup>。そして「あとで生まれ出たものはそれらがそこから生成する先行するものよりもいっそう不完全」<sup>5</sup>なのであって、流れ出した光は遠くに流れてゆけばゆくほど、最初の光である実体そのものよりも不完全なものとなってゆく。つまり、流れ出す運動は「最初の光」である実体から他のものが「生起する運動」としてのみあり、さらに他のものの生成は止ることのない流れのなかでより不完全なもの生成となってゆくのであって「継続する喪失」としてのみある<sup>6</sup>。このようにして実体の他のものとしての「存在」は「ますます暗くなる」、そして最終的には「夜」になる、すなわち、不完全な他のものあるいは「否定的なもの」が実体である「最初の光」へと還帰することのない、流れ出した光の「線の終点」となる<sup>7</sup>。ここで実体そのものから生成するとされるもの、それらがスピノザの実体論においては「属性」であり「様態」である。そして生成されたものの最終段階にある様態から「最初の光」である「実体」への還帰の道が閉ざされているということ、それが実体の自己関係の欠如なのである。

以上を述べてきたことを前提として、次節以降、ヘーゲルによるスピノザの実体論批判を詳細に検討してゆく。

## 2 外的認識および静的実体への批判

ヘーゲルによるスピノザの実体論への批判の眼目を端的にいえば、それは実体と実体への「反省」（つまり有限者が**実体**をとらえようとする働き）との

---

じることが多々あるが、ヘーゲル自身はそれらのテキストにおいて主語を「絶対者」としている。だが、それはこの「注解」がヘーゲル自身による絶対者の議論を前提として論じられているからであり、本来の流出論、あるいはスピノザの立場に立てば「実体」とするべきである。

<sup>3</sup> ibid.

<sup>4</sup> ibid.

<sup>5</sup> ibid.

<sup>6</sup> ibid.

<sup>7</sup> ibid.

関係が完全に外的なものであるということであり、さらに言えば、そのためにスピノザの論じる実体が動的なものではなく、たんなる静的なものにとどまっているということなのであって、この批判はヘーゲル自身のいわゆる「実体＝主体」論とも本質的に関連する批判なのである。すなわち、「スピノザ主義」は、つまり実体をスピノザと同じようにとらえて論じる立場は、実体への反省作用、つまり実体を規定する多様な働きが実体に対して外的であるという点で欠陥のある哲学であると、ヘーゲルは解釈する<sup>8</sup>。つまり、実体を「何ものか」としてとらえようとする思考の働きが実体に対して外的に位置づけられるにとどまっている、というのである。

スピノザが『エティカ』の体系において論じる実体も確かに「一つの実体」であり「一つの不可分の総体性」であって、それ自体として同一性をなすものとされているのであって、この実体の中に「含まれかつ解消されていないようないかなる規定態も存しない」<sup>9</sup>。そしてスピノザの実体にかんする議論においても、「自然な表象作用」やヘーゲルにおいては外的反省とされる「規定する働きをもつ悟性」に対して自立的なものとして「現われ」あるいは自立的だと「思われている」あらゆるものに対して、実体は「必然的概念」としてあり、表象作用や悟性のとらえるものは「たんなる定立された存在」へとまったく「おし下げられている」<sup>10</sup>。つまり、スピノザの実体論においても、真なるものはただ実体のみなのであって表象や悟性によってとらえられたものはたんなる仮象にすぎないということになる。スピノザは実体を、区別された多様な存在、現実到我々の目の前に広がる世界つまりは様態を、超えるとともに包括する同一性として論じているのである。また逆に表象や反省する運動はこのような同一性を仮象において、つまりなんらかの制限においてとらえて規定することしか出来ないのであるから、これらは実体に対しては否定的な運動であるのであり、このことをヘーゲル哲学において典型的

---

<sup>8</sup> 195

<sup>9</sup> ibid.

<sup>10</sup> ibid.

な形で表現すれば「規定態は否定である」<sup>11</sup>ということである。ヘーゲルもスピノザの論じる実体のこのような側面を「きわめて重要である」とし、実体の「絶対的統一」を基礎づけている「真なる、かつ単純な洞察」を「スピノザの哲学の絶対的原理」であるとして積極的に評価している<sup>12</sup>。たしかに、諸々の規定されてあるもの、端的に言えば諸々の有限者がすべて、唯一の実体に含まれている、あるいはそれらの存在が実体において解消される、スピノザが論じる実体のそのような側面は伝統的な実体の概念に反するものでもないし、また、ヘーゲルの論じる絶対者とも異なるものではない。

しかしヘーゲルによれば、スピノザの体系において反省作用による規定あるいは否定の運動は「規定態または質としての否定」<sup>13</sup>、いわば「第一の否定」にとどまり、スピノザは「第二の否定」である「絶対的否定としての否定」あるいは「自己を否定する否定」をとらえるところまでは「前進していない」<sup>14</sup>。反省作用による実体の規定は実体を不完全な仮象においてとらえることしかできない否定的な働きなのであって、これが「第一の否定」なのであるが、このような働きそのものがさらに否定されなければならない、というのである。否定の否定は肯定である。つまり、反省作用によって規定された実体が不完全で相対的な仮象である以上、それを否定するものこそが真なる実体なのであり、実体はそのようなものとして完全であり絶対的でなければならない。第二の否定によってこのような成果がもたらされなければならないのであるが、ヘーゲルによればスピノザの議論にはその段階が欠けているというのである。またヘーゲルは、スピノザの論じる実体は「絶対的形式を含んでいない」としている。つまり、反省が実体を規定するという働きを、実体を一つの「形式」においてとらえることであると表現するとすれば、その形式は不完全で相対的な観点から実体に付与される「相対的形式」であ

---

<sup>11</sup> ibid.

<sup>12</sup> ibid.

<sup>13</sup> ibid.

<sup>14</sup> ibid.

と言えよう。そして相対的なものがまさに相対的なものであるということが明らかになるためには相対的な観点を超えた絶対的な観点がなければならぬのであり、そのような観点に立ってはじめて、有限な存在者あるいは様態が実体に付与する諸々の相対的形式を包括する形式、つまり「絶対的形式」が得られるのであるが、ヘーゲルによればスピノザの実体論においてはそのようなことは不可能なのである。このこともまた第二の否定の欠如が原因である。すなわち、第二の否定によって有限な反省活動が実体に付与した形式が相対的な仮象であることが明らかになる、そして仮象であることが明らかになることは同時に相対的な形式が絶対的な形式の制限された不完全な現われであることが明らかになることでもあるはずなのである。このように、第二の否定の欠如によって、一方では反省作用による実体の規定、形式付与、あるいは認識は、実体に対して外的なものにとどまることになるのであり、また他方で一切の有限な存在者あるいは様態の活動が、唯一の絶対的な実体そのものの活動の仮象であるということが示されることはないのであって、実体は運動を欠いた静的なものにすぎないとされていると言わざるを得ない。この二つの側面は実体とそれを認識する立場との内在的連関の欠如という一つの事態の帰結なのであって、ヘーゲルはこのことを端的に、スピノザの議論においては「実体の認識は内在的認識ではない」と指摘している<sup>15</sup>。

内在的連関の欠如への批判はまた、「統一」や「同一性」ということをめぐっても展開される。ヘーゲルによれば、スピノザは実体を「思考」と「存在あるいは延長」と統一であるとしているのであり<sup>16</sup>、そのようなものとしてたしかに、実体には反省する作用が含まれているとされてはいる<sup>17</sup>。しかしヘーゲルは、スピノザの論じる実体は「延長との思考との統一においてのみ」<sup>18</sup>両者を含んでいるにすぎない、あるいは、延長と思考とはたんなる同一性

---

<sup>15</sup> ibid.

<sup>16</sup> ibid.

<sup>17</sup> ibid.

<sup>18</sup> ibid.

としてあるのであって区別されるものではない、として批判を展開している。これまで見て来た批判がスピノザの議論における反省作用に注目してなされたものであるとすれば、このような批判は実体そのものに注目してなされるものである。実体は唯一の真なる絶対的なものなのであって、思考や存在あるいは延長は実体に先立つものではない。したがって両者が「統一されたもの」が実体であるとする事は出来ない。また、「両者の同一性」が実体であるとするならば同一である両者がそもそも分化する、あるいは一つの実体が両者として現われるプロセスが一者である実体において示されなければならない。言いかえれば、実体が思考として「延長（あるいは存在論者）から自己を分離するものとして」<sup>19</sup>、つまり延長としての実体からみずからを区別することが示すことが、思考としての実体が存在あるいは延長としての実体を「規定しかつ形式づける運動」<sup>20</sup>を、また思考としての実体が実体そのものへと「還帰」する運動を、つまり唯一の実体の自己運動をとらえる端初となるはずなのであるが、ヘーゲルによればスピノザの議論にはそういった側面が欠けているのである<sup>21</sup>。このことへの批判を、ヘーゲルはスピノザが論じる「実体」「属性」「様態」の各段階において詳細に展開している。次節以降、ヘーゲルの各々の議論を概観する。

### 3 実体そのものにおける批判

これまで見てきたように、『エティカ』の体系において、反省作用による実

<sup>19</sup> ibid.

<sup>20</sup> ibid.

<sup>21</sup> これは宗教的にも重要な意義をもつ欠点であって、一方では「このことによって実体には人格性の原理がかけている」(195)、つまり神の啓示ということがスピノザの体系においては生じ得ないのであり、「スピノザの体系に対してとくに人びとが腹をたてた欠陥である」(ibid.)。他方では実体を認識することは実体に対する外的反省としてある、つまり神による啓示を通じて神と人間との超越的關係が示されるのだすれば、実体に人格性の原理が欠けているがゆえに、神と人間との間にこのような超越的關係が成立しないと同時に、人間における神への内在的理解というものも成立しないのである。

体の認識は実体に対してたんに「外的」な働きとしてある<sup>22</sup>。そして外的反省は「有限なものとして現われるもの」すなわち「属性の規定態 (思考と存在あるいは延長 論者) および様態 (思考や延長あるいは存在を担う有限者)」を、「実体から概念的に把握することも導きだすこともしない」<sup>23</sup>。反省の働きを担うものは様態である有限な存在者なのであるから、反省の運動は自らの存立の基盤として実体をもつことのない、実体に対するたんなる「外的悟性」としてあるにすぎない<sup>24</sup>。それゆえに、実体を把握する運動の始まりにおいて、反省は属性の規定をたんに「与えられたもの」としてとりあげるだけなのであり、また運動の終わりにおいてそれらの規定を実体へと「導き返す」<sup>25</sup>、あるいは実体において解消されるものとして示しはするものの、このような実体とは前節の最後に見たように、二つの属性がたんに統一されたものにすぎないのである。したがってスピノザの議論においては、反省の運動はせいぜい有限なものが実体へと還帰するということを示すのみであり、そもそもなぜ実体のみならず属性や様態といった有限なものとなるのかということをとらえることができない、つまり反省はその運動の「はじまり」を実体から「とってくるのではないのである」<sup>26</sup>。

さて、スピノザの論じた実体そのものについて、ヘーゲルはスピノザが実体に付与した概念の中でも「自分自身の原因という概念」<sup>27</sup>、いわゆる「自己原因」の概念を高く評価している。ヘーゲルはこの自己原因の概念を「実体はその本質が現実存在を自己のうちに包含しているものであるということ」<sup>28</sup>、つまり実体はその存在の根拠のみならずのうちに、さらに言え

---

<sup>22</sup> ibid. 「認識は外的反省である」(195)

<sup>23</sup> 195-196

<sup>24</sup> ibid.

<sup>25</sup> ibid.

<sup>26</sup> ibid.

<sup>27</sup> 196 「自己原因と言われる意味において、神はまたあらゆるもの原因であると主張されなければならない」(『エティカ』第一部、定理二十五、備考、106頁)。

<sup>28</sup> ibid. スピノザは「自己原因」を「その本質が存在を含むもの」(『エティカ』第一部、定義一、77頁)であると定義している。

ば、何者にも依存することのない完全に自立した絶対的なものであるということを示すものであり、そして「絶対者の概念はこの概念がそれから形成されざるをえないような他者の概念を必要としないということ」<sup>29</sup>、つまり実体が「何であるか」を示すものがまさに実体自身に他ならないということを示すものであると解釈し、これを「深くかつ正しいもの」として評価している。だが『エティカ』においては、「幾何学的方法によって証明された」というその副題が示すように、この概念はあたかもたんに「学においてははじめから直接に仮定されている定義」にすぎないものとして位置づけられている<sup>30</sup>。つまり『エティカ』においてこの概念は、「数学やその他の下位の諸学」におけると同様、たんに体系における基礎、すなわち「前提されているもの」にすぎない<sup>31</sup>。だが実体が絶対的なものであるならばそれはたんに「最初のもの、直接的なもの」ではなく、同時に「直接的なものの成果」<sup>32</sup>でなければならないのである。このこと示すためには「実体から属性へ」「属性から様態へ」という言わば片道のプロセスで議論を終わらせることなく、その逆のプロセスもまた成り立つことが論じられなければならないのであるが、ヘーゲルによればスピノザの議論は片道のプロセスを示すことで終わっているのであって、それは各段階が言わば断絶したものとして論じられているからなのである。ヘーゲルによるそのような断絶の指摘を、次の二つの節で概観する。

#### 4 属性における批判

ヘーゲルによれば『エティカ』において、属性の定義は実体の定義のあとに、実体の定義によって導かれるのではなく、たんに「立ち現われる」<sup>33</sup>、つま

<sup>29</sup> *ibid.* スピノザは「実体」を「その概念を形成するために他のものの概念を必要としないもの」(『エティカ』第一部、定義三、77頁)と定義している。

<sup>30</sup> *ibid.*

<sup>31</sup> *ibid.* 「数学やその他の下位の諸学は、自分の基礎や肯定的基礎をなしている前提されているものをもってはじめなければならない。」(*ibid.*)

<sup>32</sup> *ibid.*

<sup>33</sup> *ibid.*

りさきにも見たように、実体がなんの理由もなくみずからを限定した産物としてある、あるいはより端的に、そもそも実体との内在的連関をもたない他者としてある、と表現してもよかろう。そして属性が現われたその後ではじめて、「属性は悟性（反省作用 論者）がその本質を概念的に把握するようなものである」<sup>34</sup>と「規定されている」<sup>35</sup>。このことをヘーゲルは「スピノザは悟性を様態と規定している」<sup>36</sup>ということを理由に「悟性はその本性上属性よりも後のものと認められている」と解釈している<sup>37</sup>。さらにいえば、属性は実体に固有の規定でなければならないにもかかわらず、属性に対して「ひとつの他者」であるとされている実体に対して、「外的かつ直接的にたち現われる悟性」あるいは様態に「依存するもの」にすぎないとされている、とヘーゲルは解釈するのである<sup>38</sup>。

属性はスピノザによって、「無限」であり、それは「無限の数多性」という意味でも無限であると規定されている<sup>39</sup>。しかしスピノザの体系において現われる属性はそのなかでも思考と延長という二つのみであって、そもそもなぜ無限に多数の属性がたんに思考と延長あるいは存在という二つのものによる一つの対立へと「還元される」<sup>40</sup>のか、その必然性は示されてはいない。必然性が示されていない以上、思考と延長という二つの属性のみが取り上げられるのはたんに「経験的に」<sup>41</sup>であると言わざるをえない、とヘーゲルは論じる<sup>42</sup>。スピノザによれば、思考および存在あるいは延長はその各々が実

---

<sup>34</sup> ibid.

<sup>35</sup> ibid.スピノザは「属性」を「悟性が実体に関してその本質を構成するものとして認識するもの」（『エティカ』第一部、定義四、77頁）と定義している。

<sup>36</sup> ibid.

<sup>37</sup> ibid.

<sup>38</sup> ibid.

<sup>39</sup> 196-197 「おのおのが永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性」（『エティカ』第一部、定義六、78頁）。

<sup>40</sup> ibid.

<sup>41</sup> ibid.

<sup>42</sup> ibid. スピノザが思考と延長あるいは存在の二者を人間に認識可能な属性とした背景には、もちろん心身二元論というデカルトが残した大問題があったのであるが、そのことに関して、少なくとも『大論理学』のこの箇所ではヘーゲルは一言

体を一つの限定されたかたちにおいて「表象する」ものである、つまり限定された実体なのであり、実体そのものは「思考と存在との絶対的統一」であるとされている。したがって思考にしても延長あるいは存在にしても、それらは実体の「絶対的統一」の外部にあってもはや絶対的ではなく、実体に対して「非本質的な形式」としてあるにすぎないのである。「物の秩序は表象または思想の秩序と同じものである」といわれるにしても、それは存在と思考との「たんなる」同一性を表現するものにすぎないのであって、スピノザの議論においては実体において両者が媒介されるということは論じられていない。すなわち実体が両者の絶対的同一性として示されることはないのである<sup>43</sup>。

また属性は、唯一の実体が何らかの内的連関においてではなく、たんなる外的反省としての様態によってのみ規定され、「一方では表象の総体性」<sup>44</sup>つまり思考であり、「他方では物とその変化の総体性」<sup>45</sup>つまり延長あるいは存在であるとされるのである<sup>46</sup>。スピノザの議論においても、外的反省によってこのような区別がなされるだけではなく、外的反省は、また、この区別を「絶対的統一性へと導きもどし、その中へと沈める」働きである<sup>47</sup>とされてはいる。しかし、属性を規定するとともに属性を解消させるこの運動はそれが外的反省によってなされるものである以上、完全に実体の外部で展開される。実体そのものは思考「でも」とされてはいるものの、さきにも見たように、スピノザの議論においては、唯一の絶対的なものである実体が思考と延長あるいは存在へと分化するプロセスが論じられることはないのであり、また逆に、両者が実体において内在的に連関するものとして示されることもないのである。

---

も触れていない、ということを断っておく。

<sup>43</sup> ibid. 「観念の秩序と連結は、物の秩序と連結と同じである」(『エティカ』第二部、定理七、131頁)。

<sup>44</sup> ibid.

<sup>45</sup> ibid.

<sup>46</sup> ibid.

<sup>47</sup> ibid.

ヘーゲルは「すべてのものを永遠の相のもとに sub specie aeterni」認識せよというスピノザの要求を崇高なものとし、これを「すべてのものを実体のうちにあるとおりに考察せよという」という要求であると解釈する<sup>48</sup>。だがまさにこれまで見てきたように、実体は運動を欠いた「不動の同一性」<sup>49</sup>としての実体であるにすぎず、属性および様態はたんに外的反省によって定立されたものであるにすぎないがゆえに「生成するものとしてではなく、消失するものとしてのみある」<sup>50</sup>、すなわち実体に対する外的運動の終わりにおいて実体の同一性、しかも内在的連関なきたんなる同一性へと解消するものであるということが示されるだけであり、さらにまたその運動の出発点、つまり区別されたものとしての属性および様態という「この運動の肯定的な端初」<sup>51</sup>はたんに実体の外部において見出される規定なのであって、この運動のプロセスの全体が実体の外部で展開されているとせざるを得ないのである<sup>52</sup>。

## 5 様態における批判

ヘーゲルは属性に続く「第三のもの」<sup>53</sup>すなわち様態がスピノザによって「実体の変様」「規定された規定態」「他者のうちにあるかつこの他者によって把握されるもの」として定義されていることに着眼する<sup>54</sup>。様態に先立つ「第二のもの」である属性は、そもそも「無規定的な差異性だけを自分の規定としている」<sup>55</sup>、すなわちたんに実体の外部にあって実体に対立するもの

---

<sup>48</sup> ibid. 「理性の本性は、ものをある永遠の相のもとで観想することである」(『エティカ』第二部、定理四十四、系二、171頁)

<sup>49</sup> ibid.

<sup>50</sup> ibid.

<sup>51</sup> ibid.

<sup>52</sup> ibid.

<sup>53</sup> 197-198

<sup>54</sup> ibid. なお、スピノザは様態を「実体の変様、言いかえれば他のものうちに存在し、また、他のものによって考えられるもの」(『エティカ』第一部、定義五、77頁)であると定義している。

<sup>55</sup> ibid.

として、またたんなる思惟およびたんなる延長として、他との連関において規定されているのではなく、たんに「他に対して差異されたものという」<sup>56</sup>規定においてのみある、すなわちただたんに各々が「他とは違うもの」と規定されたものとしてのみある。そもそも属性が他ならぬ実体の属性としてある以上、属性とされるものの各々は「実体の総体性を表現している」<sup>57</sup>、つまり何がしかの形式において実体をとらえているはずなのである。言いかえれば、属性は「規定されたものとしての」実体なのであるから、ただたんに「実体とは違うもの」であるのではなく、いわばその中に実体を含んでいるのであり、属性において実体がとらえられることが可能であるはずである。ところがヘーゲルによれば、スピノザの議論においては実体はみずからを属性として規定するのではない、そうではなくて、属性をまさに属性として規定するのは様態なのである。すなわち、「第三のもの」である様態において「はじめて」、「本来的な属性の規定」すなわち何がしかの形式において実体をとらえているもの、あるいは実体を含んでいるものという属性の規定が定立されているのである<sup>58</sup>。そして『エティカ』の体系においてはこのことに続いてさらに様態が実体の仮象であって実体に解消されるものであるということ、さらに言えば「永遠の相のもと」では様態が実体に他ならないということが示されることはない。つまり「実体—属性—様態」という連関が一つの円環として完結するわけではなく、様態はあくまでも「第三のもの」として、「たんなる」様態としてあるにとどまる<sup>59</sup>。すなわち様態は、一面では「直接的に与えられたもの」であってたんに属性に対して外的なものとして見出されたものにすぎないのであり<sup>60</sup>、あるいは属性を揚棄して成立しているものなのではない。また他面では、様態の仮象性は言わば実体なき仮象性である、つまり仮象としての様態がまさに実体の仮象として示されることはないのであ

---

<sup>56</sup> ibid.

<sup>57</sup> ibid.

<sup>58</sup> ibid.

<sup>59</sup> ibid.

<sup>60</sup> ibid.

り、したがって実体みずからによる反省活動の成果として認識されることはないのである<sup>61</sup>。

## 6 結語

ヘーゲルによれば、スピノザによる実体の開示がひとつの体系であり「完全」であるのは「絶対者からはじまり、そのあとに属性を続かせ、様態でもって終わる」というその点においてのみである<sup>62</sup>。実体から属性そして様態への「発展の内的秩序」<sup>63</sup>が示されることはなく、この三者はヘーゲルが様態を「第三のもの」と呼んでいることに典型的にみられるように、「ただ継的に数えあげられているだけ」<sup>64</sup>である。そして「第三のもの」すなわち様態は、「否定としての否定」ではない、すなわち、「自己へと否定的に関係する否定」、みずからの仮象性を認識してみずからを否定することによって様態が「それ自身において」実体という「最初の同一性」へと復帰することではなく、この体系が「真の同一性」である絶対的同一性として円環をなすことはない<sup>65</sup>。言いかえれば、実体が属性および様態という実体の「非内在的存在」へと「前進する必然性」も、また属性および様態から実体という絶対的同一性へと解消してゆくプロセスも欠けているのである<sup>66</sup>。本稿の冒頭で見たように、ヘーゲルはスピノザの実体論への批判に続けてライプニッツのモナド論を批判している。それはライプニッツがスピノザとは別様に諸々の有限者同士の関係を、そして諸々の有限者と実体との関係をとらえようとしたからであって、「注解」でライプニッツの議論を取り上げている以上は、ヘーゲルはみずからの絶対者論、さらには実体論を構築する上でそれを批判的に吸収していったはずである。一見すると「第一章 絶対者」の本論にはライプニ

---

<sup>61</sup> ibid.

<sup>62</sup> 198

<sup>63</sup> ibid.

<sup>64</sup> ibid.

<sup>65</sup> ibid.

<sup>66</sup> ibid.

ツツの影響はみられないだけに、ヘーゲルが「注解」においてモナド論をどのように論じているか、詳細に検討する必要がある。論者は続けてその作業を行なう予定である。

